

---

# コイシムシ

阿波野治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コイシムシ

### 【Nコード】

N7725K

### 【作者名】

阿波野治

### 【あらすじ】

私達の身近に生息しているけれど、あまり知られていない昆虫、コイシムシのお話

先日、親子ほど年齢の離れた青年と話をした際、その人がコイシムシのことを知らなかったので、驚いた。

その青年の子供のころというのは、すでに家庭用ゲーム機が広く普及していた時代である。私達の年代の者が幼少だったところと比べれば、野外で遊ぶ機会は格段に少なかったのだろう。その事情を考慮すれば、最近の若い人がコイシムシのことを知らないのは、取り立てて驚くべきことではないのかもしれない。

ただ、コイシムシの存在が万人に周知されているものと思いついていた私にとっては、一瞬の呆れを伴った驚きの体験であった。

もしかすると、この文章を読んでくれている人の中には、先日の青年と同様、コイシムシのことを全く知らない人もいるかもしれない。そこで今回は、一つ、コイシムシについて話をしてみようと思う。

あらかじめ断りを入れておくが、私は学者や専門家といった人種ではないので、事細かな解説までは出来かねる。しかし知っていることは出来る限り詳しく、そして嘘のないように書き記していきたい所存だ。

コイシムシ。その名前が示す通り、大きさと形状が小石に酷似した昆虫である。

より具体的な姿形は、テントウムシのそれをイメージしてもらえば最も分かり易いだろうか。何目の何科の昆虫なのかは知らないが、甲虫の一種、テントウムシの仲間であることには間違いないと思われる。

ただ一つ、両者の外見上における明確な相違点は、体色である。テントウムシが赤地にいくつかの黒い斑点という色鮮やかな構成なのに対し、コイシムシは灰色と茶色の中間のような味気ない一色の

みで、模様も何も無い。落ち葉や木の幹にというよりは、鉄屑やゴミに同化するのに相応しいような、実に見栄えのしない色をしている。醜いと形容するのは言い過ぎにしても、華がない、地味な見た目なのは確かだ。

パツとしないのは動作もそうだ。愛らしく動き回り、身軽そうに空へと飛び立っていくテントウムシに対して、コイシムシはというと全くの愚鈍である。葉っぱの裏側にへばりついたまままんじりとも動かず、何度か指でつついてやるとようやく緩慢な動きを見せるといった有様だ。機敏さの欠片もなければ、愛嬌の一つも感じられない。

あなたは、雨上がりの道端に出来た浅い水溜まりなどで、薄黒くて丸い、木の実のような物体が浮かんでいるのを見かけたことはないだろうか？ 実は、あれがコイシムシなのである。

水に浮かんでいるといっても、死んでいるのではない。その生物は歴として生きている。その正否を確かめたければ、その丸い物体に、そつと指先で触れてみるといい。その物体はきつと、甦ったようにその脚を蠢かせはじめ、鈍い動きであなたの指へと這い上がってくるはずである。

いくら遅鈍な彼等といえども、その六本の細い脚を必死に動かせば、いつかは岸に辿り着けるはずだ。それなのに彼等は、己の身体が水に浮くのをいいことに、上を向いて水面に漂っている。つまり、もう助からないと諦観して動かないのではなく、躰を動かすことが億劫だという理由で、何の努力もせずに浮力に身を任せているのだ。コイシムシとは、それほどまでに物臭な虫なのである。

水に浮くということからもお分かりのように、コイシムシの躰は極めて軽量だ。それは単に躰が小さいからというのもあるが、外皮の内側が空洞で、浮子のような躰の作りをしているからでもある。

せつかくなら中身が多く詰まっているものを食べたいという下心は、人間も昆虫も同じらしい。故にコイシムシは、鳥や他の昆虫などの捕食者から、好んで食べられるということはないようだ。

あなたは、並木道などを通った際、樹木の根本に、躰を丸めた状態のダンゴムシのような物体が転がっているのを見かけたことはないだろうか？ あなたは木の実が落ちているか、はたまた鳥の糞かと思っただけにも留めずに通り過ぎていったらどうだろうか、実は、あれはコイシムシの屍骸なのである。

食料としての価値を見出されることのないコイシムシの死体は、アリにさえ見向きもされず、ただ淋しく地面に転がっている。命が尽きた後も他の生命の糧となるのが自然界という社会の役割の一つだとすれば、何と無意味で、何と反社会的な死であろうか。

しかしそんな哀れな姿も、地味で存在感のないコイシムシらしい最期だと思えてしまうから、全く奇妙なものである。

食べるという言葉が出てきたところで、話題をコイシムシの食へと移すことにしよう。

コイシムシは草食で、主に樹木の葉や芽を食べる。草木なら種類を問わずに食すという柔軟性を見せる彼等ではあるが、口にするのは若葉や新芽に限るといって、妙なところで偏食な一面も併せ持つ。その点において、彼等は害虫の一種と言えよう。

コイシムシの食害による草木の被害が深刻だというニュースは耳にした記憶がないので、実際の彼等の食欲はたかが知れたものなのかもしれない。それでも食べられる草木の側からすれば、成長の余地が大いにある己の一部を優先的に食われてしまうのだから、迷惑千万な話には違いなからう。

冴えなくて、愚鈍で、能動的にも受動的にも自然界の役に立つことはない。

この世の万物は、神様の気紛れによって創造されたようなものだから、こういう言い方は酷かもしれないが、何のために存在しているのか分からない。一言で斬り捨ててしまふのならば、コイシムシとはそのような生き物である。

コイシムシについてより詳しく理解してもらうためには、もっと語るべきことがあるのだろうか、残念ながら、私が有するコイシム

シに関しての知識が尽きた。故に、コイシムシの生態についての記述は、以上をもって擱筆させていただくことをご了承願いたい。

いかがだったでしょうか？ 私が知り得る限りのコイシムシに関する情報を、なるだけ簡潔に綴ってみましたつもりである。

ただ、コイシムシのことを存知していた人にとつては、周知の事柄が羅列されたに過ぎない、極めてつまらない文章でしかなかったことだろう。その点についてはこの場でお詫び申し上げたい。

では、コイシムシについて知らなかった人は、この文章を読み終えてどのような感想を抱いたでしょうか？ 書き手である私がそれを決定することは出来ないが、せめて予想をさせてもらおうのならば、皆さんはきつとこう思ったのではなからうか。「大した興味は湧かなかったが、もし機会があるなら、そのコイシムシとやらの姿を一目見てみたい」と。

もしそう思った人がいたなら、今すぐに外に出てみることをお奨めしたい。コイシムシはきつとあなたの近くにいますはずだ。庭でも公園でも、エサとなる木が生えている場所ならば、どこにでも彼等は棲息しているのだから。

そして樹木の葉の裏をそつと捲つてみるといい。小さくて、浅黒くて、指先でちよつと触れたくらいでは動こうとはしない、あなたが探していた生き物がいるはずだ。冴えなくて、魯鈍で、役立たずの、ちつぽけな虫が。

いや、わざわざ外に出る必要もないかもしれない。もしかしたらコイシムシは、案外、これを読んでいるあなたの隣にいるかもしれない。あなたが、あなたの側にいるコイシムシの存在に気がついていないだけで……。

あるいは、あなた自身がコイシムシなのかもしれない。

何をいきなり突飛なことを言い出すんだ、そう思った人もいるかもしれないが、私が言っているのは決して戯れ言などではない。むしろ私は、私のその言葉に対して過敏に反応した者こそがコイシム

シである、そう考えているくらいだ。

だって、ほら、考えてもみなさいよ。コイシムシ当人が、「自分はコイシムシだ」と自覚して生きているわけがないでしょう……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7725k/>

---

コイシムシ

2010年10月8日15時05分発行